

CONSERVATION VOLUNTEERS **1**

Vol.

発行：特定非営利活動法人日本環境保全ボランティアネットワーク（略称：JCVN）

巻頭言___復興の新たな年に p 1

連載_____実践的な環境保全活動の人材育成 p 2
ボランティア、ケガと弁当は自分持ち？ p 3
環境保全ボランティア活動と若者の自立支援 p 3
人材は「育成」か「成育」か？ p 4

報告_____JCVN設立の経緯と理念 p 5

お知らせ__イベント情報、事務局だよりほか p 7

巻頭言「復興の新たな年に」

重松 敏則（JCVN 理事長）

皆様、新年おめでとうございます。また、かねてより懸案であった JCVN の会報の発行が、設立後ほぼ 3 年を経て、この新しい年頭に実現できたことも喜ばしい限りです。

しかし、昨年は未曾有の東日本大震災と巨大津波により多数の人命と生活基盤・産業基盤が失われた上に、原子力発電所の事故による広域にわたる放射能汚染のため、夥しい人々が避難生活を余儀なくされ、平和で安穏な生活や仕事の場を失っておられます。また、避難されないまでも、目に見えない放射能の外部被曝及び内部被曝の脅威に日々さらされ、農作物の生産や出荷もできない多くの被害者の方々の心情を察すると、一日でも早く元の生活や生業が回復されることを願ってやみません。この他、地球温暖化の影響と考えら

れる気象の凶暴化のため、紀伊半島をはじめ全国各地で集中豪雨による洪水や山崩れの深刻な被害も多数ありました。さらに世界的な経済不況による恐慌の不安に加え、日本でも破綻寸前の国家財政、円高不況、失業者・生活困窮者の増加、少子高齢化の進行と問題は山積しています。

このような被害や問題が生じることの予測は、早くから専門家や研究者から指摘され、警告されてきたものばかりですが、歴代の政府や官僚、企業、重用される御用学者達による過小評価や無視、問題先送りでの抜本的な対策はとられてこらず、結果として深刻な事態に立ち至っているのです。平安時代の延喜元年(901年)に著された「三代実録」に、東北地方における未曾有の「貞観地震(869年)」についての記述があり、その事実と津波の

痕跡を内陸深くまでの地層の発掘調査により、今から20年も前に明らかにして、その再来の緊急性を発表し、警告した研究者がいながら、無視、見過ごされてきたことも典型的な事例であり、実に残念で悔しいものです。

私達は歴史に学び、科学の成果を正当に評価して失敗を繰り返さないようにしなければなりません。これまでの政治家や官僚、企業家の保身、御用学者の重用によるずさんな施策や公共事業、企業運営等の悪弊を断ち切り、誰しものが未来に希望のもてる持続的な社会や国土(里山・里地・里海・村・まち・都市)づくりを進める必要があります。脱原発と自然資源の循環利用による再生可能エネルギーの普及・促進は、必然のことでしょう。

海洋に囲まれ、燦々と太陽光がふりそそぐ「森の国」日本には、歴史的に培われた持続的な里山・里地・里海の生活文化と有機的な農林漁業技術・経験が脈々と受け継がれています。国際的には教育水準が高く、深刻な公害問題を克服するとともに、精密機械、IT、HV・EV自動車、ロボット等を生産するハイテク国家でもあり、また、太陽光・風力・地熱・波力・バイオマスエネルギー発電の技術や、石油に依存しないバイオガスや生分解性バイオプラスチックの合成などの技術も確立されています。さらに、医療福祉も含め様々な分野での市民活動も進んでおり、「持続可



能な社会と生物多様な国土復元をめざして」、全ての用意ができていますと言えます。後は、これらの知恵や理念を広く、国民、農林漁業家、政治家、企業、教育機関に共有してもらい、「いつでも」「だれでも」「どこでも」参加できるシステムを構築するだけです。その実現の成果は「持続可能な社会と生物多様な国土復元」の国際的なモデルとなって貢献できるに違いありません。

JCVNはそのような参加システムの実現の一環を担うことを理念に設立されたものですが、過去の悪弊から決別する世直しと復興の新たな年を迎えるにあたり、会員ならびに全国各地の多分野(民・産・官・学)にわたる多くの同志の方々のますますのご活躍と連携活動の展開を期待する次第です。

連載

JCVN理事による経験とノウハウの詰まった連載コラム！

■実践的な環境保全活動の人材育成 ～BTCVのプログラム～ (1)

朝廣 和夫 (JCVN 副代表・九州大学芸術工学研究院)

本欄では「実践的な環境保全活動の人材育成」をテーマに連載します。「実践的な～」というの



が抽象的ですが、英語では”Practical conservation work”に相当することとします。この「環境保全」とは、利用しつつ維持すること。私は「手入れ」という言葉を用いており、人と自然のバランスを保つ事といえます。このような活動に価値を置き、実践すると人と繋がり、場づくりを進める事は JCVN のみならず、社会の課題といえます。誌面は全く足りないのですが、ここで私の関わる国内外の調査・研究活動等を紹介し、Web のダウンロード情報も用いながら、JCVN を通じたコミュニケーションを形成できればと思います。まず、本日は BTCV の人材育

成プログラム¹⁾です。

「なぜ、BTCVなのか?」、英国を代表する10の環境保全団体の内、5つの団体が1969-1979年に設立されています。これは国内外における環境問題に対し、影響を受ける当事者だけでなく、広く市民や各種団体との関係づくりを強化するためでした。この中でBTCVの目標は“to encourage and facilitate active public involvement in practical conservation work in rural and urban areas.”と記述され、特に人に焦点を絞ってトレーニングや保全活動を展開してきた活動は特徴的であると言われています。2006年に国内でBTCVのトレーニングを実施した中

で、必要と意識された特徴は「伝える技能」、すなわち、フィードバックやモチベーション、そして問題解決に関する観点が高いことでした。リーダーシップや安全管理を高めるには、このような視点が必要です。論文を下記のリポジトリに公開しました。詳細はご参照ください。プログラムはJCVNへ!

1) Kazuo Asahiro, BTCV Standards Leader Training Program for Environmental Conservation Volunteers in Japan, Journal of Landscape Architecture in Asia Volume5, October 2010, Japanese Institute of Landscape Architecture, etc., p118-123, 2010.10.

リポジトリ URL: <http://hdl.handle.net/2324/2043>

■ ボランティア、ケガと弁当は自分持ち? (1)

小森 耕太 (JCVN 理事・山村塾事務局長)

林野庁の統計によると、平成9年に277団体だった森林ボランティア団体は平成21年には2,677団体まで増加しました。また、統計には出ていませんが、組織を作らずに親しい友人と自由気ままに竹林や山の手入れをしたり、野菜作りを楽しむ方々も増えてきました。一昔前に比べると、気軽に自分のスタイルで里山や農地にかかわる人達が増加してきたのではないのでしょうか。こういった傾向はとても嬉しいことですが、ボランティア団体や仲間たちでの活動の中で「ケガと弁当は自分持ち」といった聞こえのよい呼びかけが広がっていないかと心配しています。

「ケガと弁当は自分持ち」とは活動の準備や責任は自分で持つ「自己責任(①)」のことを指しています。しかし、いくら親しい間柄とは言え、友人や仲間と一緒に作業をする限り、だれかを傷つけてしまったり、逆に傷つけられたりする可能性もあります(②)。また、子どもや初心者などを誘った場合は、作業の進め方や作業場所などを指示・指導することもあるのではないのでしょうか(③)。更に、多数の人達に作業を一緒にやろうと呼びかけた場合、もしも事故が起きれば主催した人は責任を問われることとなります(④)。JCVNの講座では、これらのことについて①自己



責任、②連帯責任、③指導責任、④主催責任の4つの責任として整理しています。

「ケガと弁当は自分持ち」という気持ちを持って参加することは大切ですが、いざ事故が起きたときは、それだけでは済まないことを忘れてはなりません。だからこそ、そうならないように日頃から安全管理のトレーニングや準備など行うことがとても大切だと私たちは考えています。というわけで次号からは、安全管理のことについてのトピックをご紹介しますと思います。皆さんもケガと弁当は自分持ちには気をつけましょう!

■ 環境保全ボランティア活動と若者の自立支援 (1)

塚本 竜也 (JCVN 理事・特定非営利活動法人トチギ環境未来基地理事長)

ニート、ひきこもりなど若者の抱える問題が、社会の大きな課題となって久しくなりました。様々な対策も打たれていますが、依然として困難

を抱える若者の数は高止まりのままです。

現在日本には、ニート状態の若者が600,000人^{*}、ひきこもり状態の若者が696,000人^{**2}いると



推計されています。

JCVNでは、「いつでも」、「どこでも」、「だれでも」できる環境保全活動の推進に取り組んでいます。豊かな自然環境を保全していくためにも、参加する人にとっても有意義なことであるとの確信があるからです。

「だれでも」には、当然この若者達も含まれます。現在なかなか社会に出て力を発揮することができない状態にある若者であっても、活動の「機会」と「環境」を整えることができれば、自然環境を保全していくことに貢献できるはずです。そして、その活動を通じて若者たちは、社会に参加するための必要な経験と力を得ていくことができると考えています。

私が代表を務める、NPO 法人トチギ環境未来基

地では、そのような考えに立ち、若者自立支援団体と連携した森づくりや竹林整備事業にも取り組んでいます。参加者のコンディションに注意を払いながら、できる範囲の作業を分担していくことで、ゆっくりですが確実に成果をあげることができています。平成 22 年度には延べ 694 人の若者達と現場で作業しました。

本欄では、若者の力を引き出すにはどうすればいいか、限られたできることの範囲の中でどうやって作業の成果をあげていくことができるかなど、適切なプログラム構築など、試行錯誤の中から見出した大切だと思うことや、ノウハウについて整理をしていきたいと思います。

日本社会における環境保全活動の役割を一段高めるためには、環境保全の成果をあげながら、人を育む機会、人をつなげる機会として環境保全活動の効果や有効性を評価していく必要があると考えています。コミュニティの弱体化や地域の教育力の低下が問題視される現在、JCVNでは、「だれでも」の範囲、つまり、環境保全活動に参加できる人の入口を広げることで、人を育み、つなぐことの機会も生み出していきます。結果として、そのことが地域にある自然の価値を高めることにもつながると考えています。

※1 労働経済白書 2010 より

※2 平成 22 年若者の意識に関する調査（ひきこもり実態調査）より

■人材は「育成」か「成育」か（1）

平 由以子（JCVN 理事・特定非営利活動法人循環生活研究所事務局長）

秋の終わりに自らの光合成をやめて休眠に入った木々、ともに落ちた葉たちは、小動物や小さな生き物たちの暖かいお布団になります。さらに微生物たちによって腐食がすすみ、時間をかけて土に戻っていきます。雨はその土に還元され、たくさんの栄養を海に運びます。こうしてゆっくりと日々繰り返されている自然界のリサイクルの中で、私たち人間はせっかちに暮らしています。

昔から続いている循環の技術として堆肥づくりがあります。現代のハイテク社会においても色あせることなく受け継がれています。

堆肥づくりは、日々の暮らしの中で「だれでも」参加できる楽しい活動のひとつです。時間的な余裕がない人が多い世の中だからといって、堆肥づくりができないわけではありません。できそうなことを選んで始めてみればいい、ただそれだけの

ことです。このきっかけづくりと、経験にもとづいた実践的な講座の開催を行っています。

循環研（じゅんなまけん）の理事長の堆肥づくり歴は約 50 年。特に専門的に堆肥の知識を学ん



だわけでもなかった主婦が「元気な野菜や美しい花や樹木を育てたい」と、せっせと庭に穴を掘って台所から運んだ生ごみを埋め、雑草やせん定した残渣を土に戻すことから始まっています。

気軽にはじめるのに、土の構造や植物の細かな

仕組みなど難しいプロセスを知る必要はありません。しかし、そういった知識をもった適正技術でささえてくれるリーダーが身近にいることが重要であると JCVN は考えているのです。

報告「JCVN 設立の経緯と理念」

重松 敏則 (JCVN 理事長)

会報の発行に当たり、あらためて JCVN の設立の経緯について紹介させていただきます。

そもそもの始まりは、1990 年に筆者が文部省(当時)の在外研究員として、ロンドン大学のワイカレッジに滞在した折りに、BTCV (British Trust for Conservation Volunteers: 英国環境保全ボランティアトラスト) が開催する 1 週間の「自然の中で息抜きする保全合宿休暇 (Natural Brake Conservation Working Holidays)」に参加したことです。1988 年より市民参加の里山管理を、主に日帰りで試験的に実践していた筆者はその効果と意義を確認していましたが、この BTCV の 1 週間の自炊合宿を体験することにより、その充実感と楽しさ、未知の参加者との連帯感や信頼感が醸成されることなどに舌を巻いたのでした。

BTCV は、農業の機械化や都市化による田園景観の貧化や野生生物の減少などに危機感をもった市民 42 人により、1959 年にロンドン郊外で自然保護隊 (Conservation Corps) の名称で発足し、その活動を全国に展開するために 1970 年に BTCV として再発足することになります。その活動目標は、①田園地域における伝統的景観の維持を支援する、②会員に対する自然保護の原理と実践を訓練・教育する、③自然保護区やその他の、学術的に重要な場所の維持・管理を支援する、④田園地域での教育やアメニティ利用に貢献する、⑤都市地域での環境保全、自然復元活動を支援・促進する、⑥国民全体に環境に対する認識を啓発する、⑦学校教育現場での実践的な環境教育、自然保護教育を支援する、の 7 項目で、日本にもまさに必要とするものばかりです。

BTCV は当時、1 年間に全国のほぼ 550 カ所で四季を問わず実施される 1 週間単位の保全合宿、週末や平日(週末勤務の人や主婦、退職者等のた

め)の日帰りの保全活動、それに学校の生徒や一般市民に対する教育・啓発活動、さらに障害者の参加や母親の参加のため幼児をあずかるボランティアを用意するなど、きめ細かな「いつでも」、「どこでも」、「誰でも」参加できるシステムを確立していました。これらに加え、意欲のある市民やリーダー養成、失業者のため、チェーンソーの操作や石垣の修復など、多岐にわたる安全で生物多様性に配慮した保全技術訓練コースを各地で実施しています。

英国から帰国した筆者は、全国各地で開催されるシンポジウムやセミナーなどに招かれた機会、また「森林と市民を結ぶ全国の集い」や「全国雑木林会議」などで、BTCV の組織展開や活動の波及効果について紹介すると、毎回、聴衆から大きな反響があり、「そのようなシステムが、日本にもあるといいなあ」という要望も多数ありました。実際に関係者のあいだで「JTCV(日本環境保全ボランティアトラスト)」を是非とも実現したいと、話し合われました。

筆者はその実現には実績が必要と考え、1994 年に和歌山県橋本市での開催を皮切りに BTCV と連携して、国際ワーキングホリデーの例年の開催に参画し、1997 年からは福岡県黒木町でこれまで継続してきました。しかし、JTCV の実現には事務所の確保と専従スタッフの継続的な雇用が不可欠です。そこで、いくつかの民間企業や行政担当者、財団に助成支援を打診しましたが、1 つの活動団体に多額で継続的な助成は無理と断られました。本職の教育研究や公務も忙しく、体力不足も重なって、精力的な助成支援を求める活動の継続は無理でした。それでも「継続は力なり」の意志と、人材を育てるためにも、地域的な取り組みではありますが国際ワークの開催が途切れることはありませんでした。

表-1 実体験による波及効果

- ① 青少年や都市住民が農山村生活や農林作業を体験することで、「農山村環境や景観の良さを知り、興味を持つ」、「心身ともに生き生きする」、「視野が広がる」等々の効果が得られる。
- ② 農山村住民も都市住民や青少年に親近感を持ち、自信・元気を回復する。
- ③ 小学生や中学生・高校生も参加できるシステムを用意することによって、創意工夫に優れた、体験豊富なリーダーが育つ。
- ④ 青少年が多様な世代の社会人と寝食を共にして交流し、農林作業を体験することで、社会性や信頼感、連帯感を身につける。
- ⑤ このような青少年教育と生涯教育システムを社会に広く適用することで、国土環境や社会環境、地球環境や国際社会まで視野に入れた人材が各地で育ち、より高次の社会に進むと期待される。

筆者の定年退職が迫った2007年、身近で市民活動に取り組んでいる有志の賛同を得て、筆者らは勝手連でJCVN(日本環境保全ボランティアネットワーク)という名称の組織を立ち上げました。JTCVとしなかったのは、既に日本全国の大都市を中心に、多くの実績のある活発な活動を展開している諸団体があり、地域的なネットワークを構築している都府県や市もあること、さらに「森づくりフォーラム」のように全国展開している団体もあったからです。しかし、一部の例を除き、地域の特定の雑木林や谷津田の保全、あるいはスギ・ヒノキ人工林の間伐を主活動としていたり、また、以前に比較し、行政や企業からの助成は増額されたが、相変わらず運営資金難や会員不足及び高齢化などの声も聞かれます。

子供も青少年も大人も、里山や里地、川、海浜などでの保全活動に参加すると、生き生きと見違えるようになりますが、多くがそのような体験の機会もなく過密の都市で育ち暮らし、自殺・引きこもり・わが子の虐待死・失業など、社会問題は深刻になるばかりです。

子供のころから自然体験も社会体験にも恵まれず、多くの若者は農林業や農山村にいわゆる3K(きつい・汚い・暗い)のイメージしか持っていない実状にあります。これではいけないと、筆者が担当した講義で、参加すれば「良」を保証すると勧誘して、学生達を大学バスで連れ出し、スギ・ヒノキ林の間伐や田植え、稲刈り等の作業を体験させると、みんな大喜びで、中には「おかげで視野が広がった。半ば強制でもよいから、全国

の大学や学校でも参加できるシステムをつくるべきだ」とアンケートに書く学生もいました。

東京都の世田谷区や兵庫県のように、既に全ての小学5年生に1週間程度、農山村生活や農林作業を体験させる制度を実現している自治体の例や、保育園や幼稚園で里山体験や稲作体験を取り入れて、幼児達を生き生きとさせている事例もあります。

しかし、そのような制度や体制を全国の保育・幼稚園や学校・大学にも取り入れ、一般化するには、農山漁村住民の協力や宿泊施設、そして何よりも世話や運営、安全に農林漁業の作業体験や里山・里地・川・里海などでの遊びを指導できるリーダーの養成が不可欠です。それには全国各地で既に活動を進め有能なリーダーを輩出しているボランティア団体が有効な役割を果たすに違いないのですが、絶対的なリーダー不足の中で、抜本的な助成支援や全国的な協力体制(ネットワーク)の確立も必要不可欠です。

学問への意欲を高める上でも、高校や大学への入学には、半年または1年間のボランティア体験を前提にすることも有効と考えます。取得単位として認定したり、幹旋システムの構築や身体障害者は免除するなど、きめこまかい制度設計が必要です。1年間の場合には、半年は老人介護施設など医療福祉分野でのボランティア体験を含めるのも有効でしょう。

JCVNのメンバーはNPO法人の認可を受けるため定款の準備を進めつつ、活動を継続し、2009年8月末に認可を得ました。活動資金はほとんど無いので、とりあえず筆者の自宅に事務局を置くことにし、理事は全国各地で活躍されている方々に依頼したかったのですが、旅費の手当てが出せないため、身近で活動する人で構成されることになりました。

筆者は、これからの社会的安全保障(危機管理)を



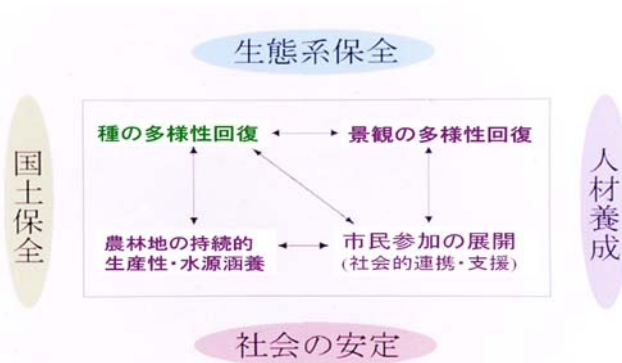


図-1 社会的連携・支援による市民参加の展開の効果

視野に入れた、資源循環型共生社会の実現をめざして、以下の3つの社会参加システムの構築を提案します。

- ①里山・里地や川・里海での自然体験や農林漁業体験を通して、自然と社会に興味や好奇心を持ち、創意工夫に富んだ、気力と情熱にあふれた人材が育つ社会参加システム。
- ②都市民も里山や農地、川、里海の保全活動に関することで、心身のリフレッシュと環境認識や連帯感を培い、省エネルギーの励行や自然エネルギーの活用等を基盤に、精神的豊かさを楽しむライフスタイルが一般化する社会参加システム。
- ③農山漁村住民と都市住民の広域連携により、

水・食糧・木材・バイオマスエネルギー等の自然資源が持続的に保全・活用される社会参加システム。

以上のような社会参加システムの構築には、市民参加と中山間地域住民の積極的な参加・連携のみならず、教育機関の参加、地方自治体や政府、中央省庁の横断的な支援・協力、ならびに企業の社会貢献や助成支援など、総参加と連携による取組みが不可欠です。

このような総参加の取組みに対し、JCVNは今後全国の多様な活動団体と連携しながら、リーダー養成を中心に表-2のような事業や活動を進め、力を発揮できればと願っています。

表-2 JCVNの事業および目標

- 環境保全ボランティア活動事業
- 自然体験、農林業体験活動事業
- 環境保全活動人材育成事業（リーダー養成）
- 環境保全の普及啓発や調査研究事業
- 国内外の環境保全活動団体との連携協力と活動支援
海外や全国各地の活動団体との連携
活動プログラム情報の提供・共有
環境保全技術・経験・ノウハウの提供・交換
- 活動実績による社会的認識の獲得
- いつでも・どこでも・誰でも参加できる
地域的・全国的システムの確立

お知らせ

イベント情報やボランティア情報、事務局だよりほか

●イベント情報

2月11日 リーダーミーティング

「パートナーシップで自然歩道を守る」

日時：2012年2月11日 13:30～17:00

会場：福岡市内の会議室（未定）

主催：JCVN

後援（予定）：環境省、福岡県、NPO法人日本
トレッキング協会ほか

内容：基調講演__岡野隆宏さん（鹿児島大学）

事例紹介__朝廣和夫さん（九州大学）

小森耕太さん（山村塾）

全体ワークショップほか

毎年、開催しているリーダーミーティング。環

境保全活動に取り組むいろんな方との出会いと交流を実現してきました。今年も、昨年と同様2月11日に実施します。

今年のテーマは「自然歩道(ロングトレイル)」。

登山やアウトドアが好きな人たちの中で長距離を歩くトレッキングが注目されつつあります。その一方で、各地の里山と同様、道が荒れたり森の手入れが行われていなかったり、標識が壊れたままになっている残念な状況も見られます。

九州自然歩道の管理者である環境省や県や市町村、各地のボランティアをつなぎ、保全活動の連携や強化のきっかけにしたいと考えています。

テーマは「協働による九州自然歩道の再生」とそれによる「環境保全ボランティア活動の強化」。

保全ボランティアの方もアウトドア好きの方も、ぜひご参加ください！詳しくは事務局まで。

●書籍・CDの紹介

「よみがえれ里山・里地・里海」築地書館
重松 敏則+JCVN編 価格：¥3,780

これからの持続循環型社会、生物多様な環境を維持するのに欠かすことのできない里山、里地、里海、川をどのように保全し、利用するべきか。日本の里山、里地の変化を詳しく追い、今後の展望を切り拓く。JCVN理事らを中心に分担執筆した事例豊富な一冊です。



「里山讃歌～よみがえれ故郷・山・川・海～」

歌唱：山崎伸司
作詞・作曲：重松敏則
編曲：松尾直美
演奏：志村聖子
デザイン：原愛子
制作：JCVN



実際の風景や体験をもとに生まれたメロディと歌詞はまさに里山の世界。「里山讃歌」と「よみがえれ故郷・山・川・海」の2曲を歌入りとピアノ演奏のみのバージョンで収録。頒価¥300-

●事務局だより 浅田 真知子 (JCVN事務局)

JCVNの幹事団体である、NPO法人グリーンシティ福岡。JCVNで事務局を務める私は、いつもはグリーンシティ福岡で活動しています。グリーンシティ福岡では、平成21年から福岡市の志賀島で、史跡や名所に向かう道路沿いにある、管理が行き届いていない樹林地整備の活動を行ってきました。地元の方、広く市内外から来るボランティアの方、企業ボランティア、学生団体など、毎回総勢15～25名ほど、多い時では40名近くで活動を続けてきました。毎回、グループリーダーが2名、統括が1名、

技術指導をする造園業の方数名の体制で行っていましたが、参加者が20名を超える人数になると、どうしても目が行き届きにくくなってきます。またこの活動は、メンバーや作業地の状況などにおいてこれまでの保全作業とは少しいメージが異なります。現場は車道沿いである上、必ずしも複数のグループが近くで作業できるわけではありません。加えて、作業に自信のある地元の農家さんや、常連のボランティアさん、森での作業が初体験の方、それに造園業の方が加わると、みんな作業のペースが全く違って、最初は私自身も軽いパニック状態になってしまいました。

活動を繰り返すうちに、リーダーとして求められるこの活動ならではの動きや、皆の作業ペース・個性を読み取れるようになり、ずいぶんスムーズに運営できるようになりました。参加者の皆さんが、私たちのリーダーとしてのスキルを育ててくれたというようにも感じています。何といたってもありがたいのは、最初は好き勝手に活動していた常連のボランティアの方々が、私を困らせまいと指示や声掛けに対して協力的に動いてくれるようになったことでしょうか。それでもやはり、活動をサポートしてくれるリーダーがあと何人かいたら・・・というのが、とスタッフ同士の共通の思いです。リーダーの必要性を、実感を持って毎回感じています。

次回1月21日が、実は事業としては最後の活動日。最後ということもあり、参加者は50名近くになる予定です。どのように、どんな体制でやるか企画を立てるのもリーダーの役割ですが、それにしても人数が多い！日程が迫っていますが、力を貸していただけるリーダーの方、大募集です。事務局の浅田宛にご連絡ください。

CONSERVATION VOLUNTEERS 1

- 発行日：平成24年1月10日
- 発行頻度：年4回（1月、4月、7月、10月）
- 発行：特定非営利活動法人日本環境保全ボランティアネットワーク（略称：JCVN）
- 事務局：〒810-0022福岡市中央区薬院4-5-2-202
tel/fax: 092-215-3966
e-mail: info@greencity-f.org